

表現力育成についての一考察 —表現発表会をとおして—

津山 美紀^{*1}・冨永 剛^{*1}・相原 豊^{*2}

^{*1}九州女子短期大学子ども健康学科

^{*2}九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2014年6月5日受付、2014年7月10日受理)

要 旨

本研究の目的は、「表現発表会」をとおして表現の授業の在り方や進め方を検証し、表現力を身につけるための教育方法を確立していくことである。調査方法は、「保育所保育指針」と「幼稚園教育要領」の表現領域のねらいに視点をあて、「表現発表会」の終了までに、計4回の意識調査を実施し分析を行った。具体的には、学生に対しては表現における①心情②意欲③態度の3つの観点から、創作開始時から発表会の本番までの学生の目的到達度を調査した。

また、発表会の観客に対しては、学生の表現内容がどのように伝わったかを分析した。

その結果、以下のことが明らかになった。

- ① 表現する楽しさや喜びは、創作開始時と発表会当日では大幅な伸びがみられたが、人前で表現することを恥ずかしいと感じる学生が多い。
- ② 良い作品になるように努力していくことや、将来発表会の経験を生かしたいと思う学生は多いが、作品づくりで積極的に自分の意見を述べている学生は半数程度である。
- ③ 表現したい内容をイメージすることや自分が描いたイメージを表現できていると思っている学生は約7割程度であり、観客がどのように感じるかを意識した表現についても同レベルであった。

本授業の目的のひとつである「表現する楽しさや喜びを体験する」や「豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにする」や「3分野を融合し実践力を身につける」は、観客の調査結果から目標が達成されたことが客観的に裏付けされている。しかし、学生自身の積極的な意欲の部分では11月から発表会当日まであまり変化がなく、積極性を養うことや表現したいもののイメージが持てるような授業内容や指導法の検討が必要だといえる。

1. はじめに

幼稚園教諭・保育士養成校において保育内容（表現）の授業内容については、「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」に沿って、学生の表現力を培うために各養成校色々な工夫が

なされている。また、学生の表現力を培うための取り組みの一つとして、色々な趣向を凝らして学生による表現発表会を開催し、観客に披露することによって教育者・保育者としての実践力を身に付けている養成校は少なくない。人前で表現することを意識して表現活動を行うことは良い作品に仕上げたいという意欲や表現したい作品のイメージを持つことに繋がると考える。音楽表現作品発表会についての実践報告と「見る側と見られる側の意識調査」について(北村、1992年)¹⁾、教育的意義の研究も報告されている。

本学科では、保育内容(表現)領域の授業を「音楽表現」「造形表現」「身体表現」の総合的視点で捉え、各々の専門分野の教員3名で担当している。また授業の到達目標を以下のよう設定している。

- ① 豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにする。
- ② 3分野を融合し実践力を身につける。
- ③ 人前でも感じたことや考えたことを自分なりに表現できる学生を育てる。
- ④ 表現する楽しさや喜びを体験する。

半期という短い期間の中で上記の目標を達成するために、学期末に「表現発表会」を行ない、創作過程や発表準備、ステージでの体験や観客の反響をとおして、表現力の育成および学生の総合的な能力の向上を目指すこととした。

そこで本研究は、「表現発表会」をとおして学生の表現力に対する意識調査を実施し、「保育所保育指針」と「幼稚園教育要領」の表現領域のねらいや内容に視点を当て、授業内容の有効性を考察する。具体的には、学生に対しては創作過程から発表会の本番までの学生の表現における①心情②意欲③態度の3点を調査し、発表会の観客に対しては、学生の表現内容がどのように伝わったかを分析し考察を行った。

2. 研究目的および方法

(1) 目的

- ① 表現発表会をとおして、学生の表現に対する意識の変化や表現技術の習得度を分析し、表現の授業の在り方や進め方を検証する。
- ② 表現力を身につけるための教育方法を確立していく。

(2) 方法

- ① 対象者：九州女子短期大学子ども健康学科および初等教育科
科目名／保育内容(表現)履修学生 1年生106名、2年生1名
幼稚園二種免許必修科目、保育士資格選択科目
「表現発表会」観客(短期大学学生・保護者・附属幼稚園園児・地域住民等)
99名
- ② 研究時期：2011年9月30日～1月30日(後期の授業15回)

保育内容（表現）の授業の中で行う。

③ 調査内容：

(1) 学生に対する質問紙によるアンケート（11月、12月、1月、発表会当日の4回）
調査項目については、次の3項目である。

① 心情について

- ・表現することを楽しんでますか？
- ・人前で表現することは恥ずかしいですか？
- ・表現することに喜び（やりがい）を感じますか？

②意欲について

- ・作品づくりで積極的に自分の意見を述べていますか？
- ・良い作品となるように大変な時でも努力していこうと思えますか？
- ・将来的に、この経験を生かしたいと思えますか？

③態度について

- ・表現したい内容をイメージできていますか？
- ・自分が描いたイメージを音楽・造形・身体を使って具体的に表現できていますか？
- ・観客（観てもらう人）を考えた表現ができていますか？

(2) 観客に対する質問紙によるアンケート

- ① 発表会は楽しめましたか？
- ② 作品の内容は伝わりましたか？
- ③ 学生の表現に対する意欲は伝わりましたか？
- ④ 印象に残った作品について、作品名を記入してください。

3. 「保育所保育指針」における「表現」の捉え方

表現に関わる内容は、(2) 教育に関わるねらい及び内容の「表現」領域のひとつに位置づけられている。「保育所保育指針」²⁾ および「幼稚園教育要領」の表現領域における記述に関して、感じたことや考えたことを表現することを通して、豊かな感性や表現力を養い、想像力を豊かにするというねらいは共通であると考えられる。また、内容に関しても類似しているため、以下の記述に関しては、「保育所保育指針」を抜粋し、「オ 表現」に焦点を当てながら表現の捉え方を述べたい。

表現の目標は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」となっており、それを達成するために以下の3つのねらいが設置されている。

(ア) ねらい

- ① いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。(棒線筆者)

- ② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(棒線筆者)
- ③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。(棒線筆者)

①では、いろいろな物という表現になっているが、音楽の場合は楽器だけではなく、感覚的に捉える音や音楽も含まれ、身体表現でも目で見えない空間も含まれていると考える。

②では、自分なりに表現するとは、自分がどのように表現すれば相手に伝わるかが重要である。そのためには、表現しようとする意欲や自分を理解してもらおうとするために他者と積極的にコミュニケーションを取る必要がある。自分なりに表現したことが周囲に伝わることにより、表現することの楽しさや大切さに気づくと考えられる。

③の様々な表現とは、②で育った意欲が表現を楽しむ気持ちをさらに膨らませ表現する気持ちを育むことに繋がると考えられる。

4. 「表現発表会」についての概要

場所：九州共立大学自由ヶ丘会館（426名収容）

時間：午後14時開演16時終演

プログラム：

- (1) ダンス
 - ・テトリス（創作ダンス）
 - ・ヘビーローテーション（既成のダンス）
 - ・ソーラン節（創作ダンス）
 - ・パコと魔法の絵本より「メモリーズ」（創作ダンス）
- (2) 大型紙芝居
 - ・けんくんのくれよん
- (3) ペープサート
 - ・やさいのパーティー
- (4) オペレッタ
 - ・オズの魔法使い

5. 授業内容および授業到達目標

授業初日に、ABCクラスの中で大型紙芝居、ペープサート、ダンスのどれを希望するか、D、E～Hクラス（オペレッタ）の中で出演者、音響、衣装、舞台美術のどれを希望するか調査を行った。（いずれも第2希望まで）その結果、ダンス20名、大型紙芝居20名、ペープサート22名、オペレッタ30名、舞台美術4名、音楽2名、衣装2名となった。

(1) ダンス・・・プログラム：テトリス・ヘビーローテーション・ソーラン節・メモリーズ

保育内容（表現）における身体的パートとして担当し、20名の学生を指導した。最初のオリエンテーションにおいて、10人ずつの2チーム体制（Aチーム・Bチーム）の実施とした。

Aチーム＝可愛らしさを表現する。Bチーム＝ダイナミックで硬派さを表現する。

上記の目標を持った2チームとし、リーダーを各チーム2名ずつ選出させテーマに合ったプログラム制作・計画・実施・変更調整まで責任をもって実施することを指導した。

子どもに対しての身体表現は殆どの場合、音楽やリズムに合わせ様々な動きをイメージして実際に合わせた上での調整となる。また松本らの『ダンス表現学習指導全書』において以下のような『ねらい』のもとで具体的な目標を示している。

「身体表現」

- ① 単一運動の繰り返しやその変化、運動の組み合わせなど、いろいろな動きを経験し、リズムカルに体を動かす喜びを味わえるようにする。
- ② 身の回りの事物からのイメージによる動きを工夫し、表現の楽しさを知るようにする。
- ③ 音楽的なリズム反応により、リズムにのる楽しさを味わいながら、リズム感覚を養う。

【松本千代栄（1980）大修館書店】³⁾

としている。したがって、上記の内容を理解したうえで実施し、実感しておかなければならないと考えられる。ゆえに2年間の大学生活のなかで子どもの教育を目標として、資格免許の取得を目指す学生にとっては、プログラム作成から実施し公演できるチャンスは非常に有効である。オリエンテーションにおける2チーム統一の計画として、第2回目までに各自印象に残る身の回り事物から3分前後の音楽を決めてくる事が課題とされた。課題音楽決定後に、3週をかけて振り付けを決めながら練習し、5週目にはプログラムを確定することとした。全体のプログラム担当教員からの提案で、会場に来た子ども達とその場でできる簡単なダンスも同時に行うこととなった。学生と試行錯誤した結果、最初のプログラムはBチームによる『テトリス』として硬派な感じのロシア音楽のダンスでオープニングを飾る。すぐにAチームと入れ替わり、Aチームの可愛らしさを表現目標としたAKB48の『ヘビーローテーション』をアレンジして実施することになった。その後、学生の挨拶の後にBチームによる『ソーラン節』を演技するプログラムとなった（写真②）。会場で子ども達と実施するダンスは『パコと魔法の絵本』より～メモリーズ～として単一運動の繰り返しが多めの運動を来場者＋出演者全員で実施することとした（写真④）。6週目以降からは、Aチーム、Bチームそれぞれで1曲の通し練習が中心となり、授業のない空き時間で数名単位での練習も行っていった。年内最後の練習である10週目は、ダンスパートでの通し練習を行い、時間、立ち位置、振り付け等の最終確認ができた。その結果、時間等は問題なかったが、実際のステージの大きさを確認して立ち位置が変わり、振りの大きさや足の上げ方が変わる可能性が出てきたため、年明けのリハーサルでは衣装、出方、立ち位置、退場と入れ替わりのタイミング等を入念に

チェックすることとなった。年末年始後に発表会となったため各チームとも振り付けや立ち位置に多少の不安はあったものの、本番前日に実施したステージリハーサルでは『何とか乗り切った』という内容であった。そのためリハーサル終了後にもう一度、入場～実施～退場・入れ替わり～実施と立ち位置の確認でダンスパートだけの居残り練習を実施した。当日は午後2時からの公演であったため、午前中にもう一度、リハーサルによる確認ができた。やはり当日ということや、衣装・照明・音楽装置により緊張はしていたが、緊張が効果的に働き、筋肉反応が良くなった。その結果いわゆる“キレのある”動きが見られ、その良いイメージのまま本番を迎えることになった。

(2) 大型紙芝居・・・プログラム：けんくんのくれよん

大型紙芝居については、ストーリーを決めることから始めた。オリジナルのストーリーが望ましいと思われたが、制作時間も考慮し各自で良いと思う絵本を持ち寄り、お互い読み合ってその中からみんなが良いと思うものを挙げるように教員から助言を行った。しかし、読み合っていくうちに、いくつかの絵本を参考にしながら自分達でオリジナルのストーリーを作りたいという意見でまとめ、学生の意欲が感じられる結果となった。学生が考えたストーリーを簡単にまとめると、主人公のけん君がお誕生日にクレヨンをお母さんからプレゼントしてもらおうが、その中の黒のクレヨン（くろ君）を使わなくなってしまう。使われなくて寂しがるくろ君。しかし最後には、先生から黒のクレヨンは夜空や大きな宇宙までも描けることを教わったけん君が、くろ君を使って素晴らしい絵を描くというもので、タイトルは「けんくんのくれよん」となった。

題材が決まったところで脚本と制作に分かれて、脚本は細かい台詞作り、制作はダンボールを土台に模造紙を貼付け、その上から絵を描いていく作業にとりかかった。ダンボールは、大学で廃棄予定のものに加えて、本取り組みにおいては地域社会との結びつきも大事にしたいということをふまえて、近所のお店からいただくことにした。学生同士の話し合いの結果、紙芝居の一枚一枚に絵のばらつきがないように、ベースとなる下絵はひとりの学生で担当し、色塗りを残りの学生で行うことになったが、最初のうちは下絵に時間がかかり、色塗りの学生が待つ時間が多く見られた。もう少し効率の良い方法を見出すように促す必要があったと感じている。紙芝居の絵を制作するのと平行して、紙芝居のフレーム作りを行った。かなりの大きさがあることから、危険がないようにという配慮も含めて、しっかりとしたものを作る必要があった。学生同士の話し合いの中では、ダンボールで作るアイデアも出たが、材木を使って作るように助言した。木工に慣れていないこともあって、悪戦苦闘しながらも出来上がったフレームは素晴らしいものになった（写真①）。台詞、紙芝居、フレームが完成したところで、数週にわたって本番同様に稽古を行った。台詞を読むスピード、大きさ、紙芝居をめくる方法、タイミング、フレームの設置方法など、課題は多くあったが、学生自身に

よってひとつひとつクリアしていき、発表会での観客の反応も良く、取り組み全般にわたって成功と言えるだろう。

音楽については、紙芝居の場面にあった音楽をセレクトすることから始めた。まず、テーマ曲は、全体の話の内容を左右する大事な音楽になるので、学生が数曲セレクトした中から、大型紙芝居の担当で聴き合い、観客がウキウキする気分になるような曲をセレクトした。音楽の挿入のタイミングについては、ナレーションやセリフの流れを損なわないように留意した。くろ君とおもちゃの仲間たちが歌ったり踊ったりする場面は、「おもちゃのチャチャチャ」を2番まで全員で歌い、カスタネットや鈴を合わせて楽しい雰囲気を醸し出せるようにした。音楽の音量についても、リハーサルを繰り返し行いセリフがよく聞こえるように音楽があまり前面に出ないように注意を払った。当日は会場も広くお客さんが入ると音が吸収されてしまうので、リハーサルを入念に行う中で、音量を微調整しながら音楽とセリフのバランスを図った。

(3) ペープサート・・・プログラム：やさいのパーティー

初回の授業はペープサートとして適切な題材を、各自一冊ずつ絵本から選び、お互いに絵本を読み、内容を確認した。その中で、幅広い年齢層の子どもたちが楽しめて、ペープサートに相応しい内容の絵本を吟味し全員一致で「やさいのパーティー」に決定した。絵本に少し手を加えながらオリジナルティを出すようにして台本作りを行った。次に、ペープサートを制作する前にイメージを膨らませるために、台本の流れに沿って紙芝居風に絵を描き場面設定を行った。その後、音楽、背景、小道具と役割分担をし、それぞれの制作に取り掛かった。配役は、ナレーションとペープサートを動かしながら演じる人を決定し、演じる人が自分の担当のペープサートを制作することになった。ペープサートは、8種類の野菜（にんじん大臣・パセリ・キャベツ王・トマト姫・レタス・レモン・グリーンピース・ピーマン）とサラダ・マヨネーズである。ペープサートのサイズは会場が広いので、会場の後部座席からも見える大きさ（100cm×70cm）に作成した。背景は「やさいの国」と「パーティー会場」の2枚を制作した。音楽は既成のCDを利用し、オープニングと8つの場面①王子と姫②にんじん大臣③レタス④パセリ⑤レモン⑥ピーマン⑦グリーンピース⑧王子と姫の各々のテーマ曲を全員で歌った。歌は既成曲であるが、全曲大変グレードが高く難しい曲であった。1年生ということもあってまだ発声の基礎が出来ていなくてしばらくは小さい声しか出せなかった。ので、大きい声で歌うように指導すると怒鳴り声になり、曲のイメージからほど遠い結果の歌声になってしまった。そこで、①声は小さくてもいいので口を大きく開けて言葉をきちんと伝えるようにすること②歌詞の意味を理解し、歌詞をしっかりと覚えること③恥ずかしがらずに役になりきることの3点ができるようにすることを第一目標にした。その3点ができるようにになると、しだいに声もよく響くようになり、絵本が伝えたいことをイメージし、歌と

セリフの双方の練習を重ねた。さらに観客に伝わる表現方法として、歌やセリフ以外でいかにイメージを膨らませたらいいかと皆で考えた結果、「魔法つかいのマヨネーズ」が登場するところで、シャボン玉を舞台の上手と下手の2ヶ所から交差して飛ばす案が出て採用された。本番では、シャボン玉を飛ばしたことで想像以上に観客から歓声があがったため、豊かなイメージを持つことや工夫することの大切さを学んだと思われる。

(4) オペレッタ・・・プログラム：オズの魔法使い

初回の授業は物語の内容を把握するために、他大学が上演したDVD鑑賞を行った。その後、既成の台本を配布し配役、音楽、衣装担当を決めた。台本の読み合わせや立ち稽古など順次行っていったが、練習開始当初は一つの場面を丁寧に練習していくのか、全体をなるべく通しながら徐々に内容を把握していくのか学生間で幾度となく話し合いの時間を持った。授業時間数が限られているが、物語が長大であるため、なかなか練習計画が効率よく立てられなかった。結局、場面ごとにグループ分けをして丁寧に練習を積み重ねていくことにし、ある程度まとまってから通し稽古を行った。初めは、自分のセリフを言うだけで何の工夫も見られなかったが、練習を重ねる度に学生間で意見を出し合えるようになり、どのように表現したら観客に伝わるのかを考えるような練習風景に変化していった。踊りについては、それぞれの場面において、音楽に合わせて自分たちですべて踊りを創作した。その際、動きが単調にならないこと、快活にのびのびと踊ることを念頭に置いた身体表現を行うよう指導した。音楽は、既成のCDと場面に添ったBGMを音楽担当の学生がセレクトした。主役に準じる配役の学生はソロで歌う場面が多く、大きい声量で観客に歌詞がはっきり伝わる声で歌うことがなかなかできなかったが、舞台でのリハーサルを数回行い、ビデオで撮影して自分たちの歌声を客観的に聴くことにより、少しずつ改善されていった。

舞台美術については、最初に「オズの魔法使い」のストーリーの中で必要となる背景はどのようなものか考えることを学生に促した。その上で、限られた条件（予算・制作時間）の中で出来る、効果的な背景とは何かを決めることにした。また、背景を転換させる際にかかる時間を考慮し、最終的には、最初からドロシー、かかし、ブリキ、ライオン、トトが登場するシーンまでの一枚、エメラルドの都のシーンから最後まで一枚、計2枚の背景を制作することになった。1枚の大きさは、会場のステージの大きさ（縦5.6m、横12.5m、天井までの高さ約5m）に合わせて、縦3.5m、横7.98mである。（写真③）

実際のステージの大きさを学生に伝え、イメージを膨らませるように指導を行った。「これから何を作るかイメージする」ということは造形活動においてあたりまえのようだが、保育における造形活動で保育者が一から十まで制作内容から制作手順を説明し、子どもがイメージする過程を省いてしまっている場合も多い。造形活動において重要なのは出来上がった作品のみではなく、そこにいたるまでの過程で、考え、気づき、工夫すること、その基礎に

は「イメージすること」がある。そのことを、これから保育の現場で子どもたちと関わっていく学生が、自らが経験し理解することが重要である。

ここで、完成までの流れを説明する。まず、実物と同じ縦横の割合でA3サイズ程の下絵を描き、その中にいくつか目安となるマスを入れる。次に、白模造紙ロールをつなぎ合わせて、背景となる台紙を作り、それに下絵に入れたのと同様にマスを描き込む。下絵の線がマスのどこに位置するか確認しながら、台紙の方に鉛筆で下絵を写して行く。この方法だと、ほぼ下絵と同じものが大きな紙にも描けると同時に、多くの人数で制作活動を一緒に行えるというメリットがある。台紙に下絵を写し終えたら、着色し、完成となる。今回は4名という少人数で、ほとんどの学生が初めてとなる大規模な制作活動であった為、無理なく立てたつもりスケジュールも大幅に遅れが生じた。そんな中で、初めは指示されて動いていた学生が、自主的に授業外の時間も集まり制作を行うようになり、お互いが助け合うといったチームワークも見られた。これは、本取り組みの大きな成果と言えるだろう。完成した作品も、観客が遠くから見ても大丈夫なような配色にする（強弱をつける）、子どもにとって分かりやすいものにする等の工夫があり、舞台の背景としての役割を十分果たしていたと考えられる。

6. 分析結果・考察

学生に対する質問紙によるアンケート結果の分析は次のとおりである。

①心情については、表現する楽しさや喜びを感じる学生が約90%おり、練習を重ねる毎に大幅な伸びが見られた。その反面、36%の学生が人前で表現することを発表会当日も恥ずかしいと感じている。人前で表現する経験不足や作品づくりに対する自信のなさが恥ずかしさに繋がっていると思われる。②意欲については、良い作品になるように努力していくことや、将来発表会の経験を生かしたいと思う学生は約80%であるが、作品づくりで積極的に自分の意見を述べている学生は平均して60%に留まっている。作品づくりの段階で学生同士の活発なディスカッションはあまり見られない消極的なグループもあった。③態度については、表現したい内容をイメージすることや自分が描いたイメージを表現できていると思っている学生は約70%であり、観客がどのように感じるかを意識した表現についても同レベルである。積極的にイメージを持って作品づくりに臨む態度が必要であると思われる。観客に対するアンケート結果の分析は次のとおりである。「発表会は楽しめた」と回答した観客は100%であり、同じく作品の内容、作品に対する意欲が伝わったと回答している。本授業の目的のひとつである「表現する楽しさや喜びを体験する」や「豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにする」や「3分野を融合し実践力を身につける」は、観客の調査結果をから目標が達成されたことが客観的に裏付けされている。しかし、学生自身の積極的な意欲の部分では発表会当日まであまり変化がなく、積極性を養うことや表現したいもののイメージを持てるような授業内容や指導法の検討が必要だといえる。

<アンケート結果>

- ・対象者：①九州女子短期大学子ども健康学科および初等教育科

科目名／保育内容（表現）履修学生 1年生106名、2年生1名

②「表現発表会」

観客（短期大学学生・保護者・附属幼稚園園児・地域住民等）99名

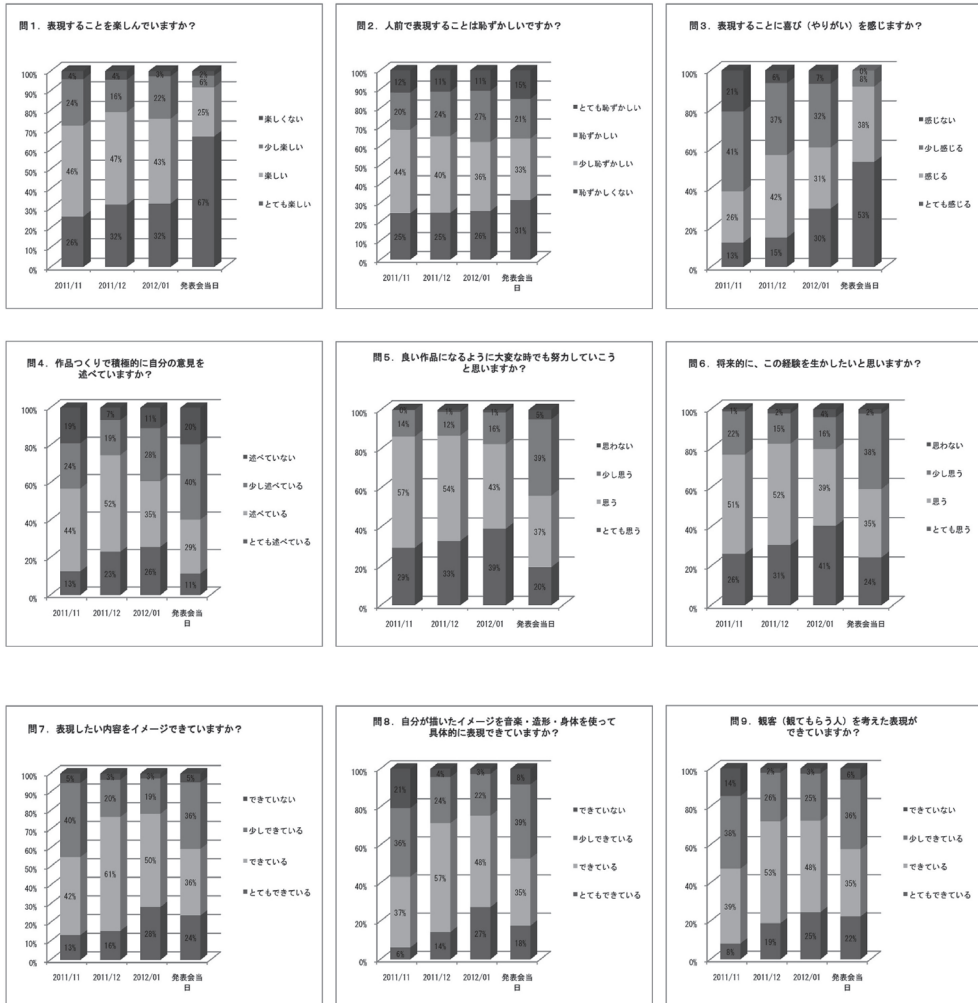
- ・アンケート実施日：学生に対するアンケート／4回実施

平成23年11月4日（1回目） 平成23年12月2日（2回目）

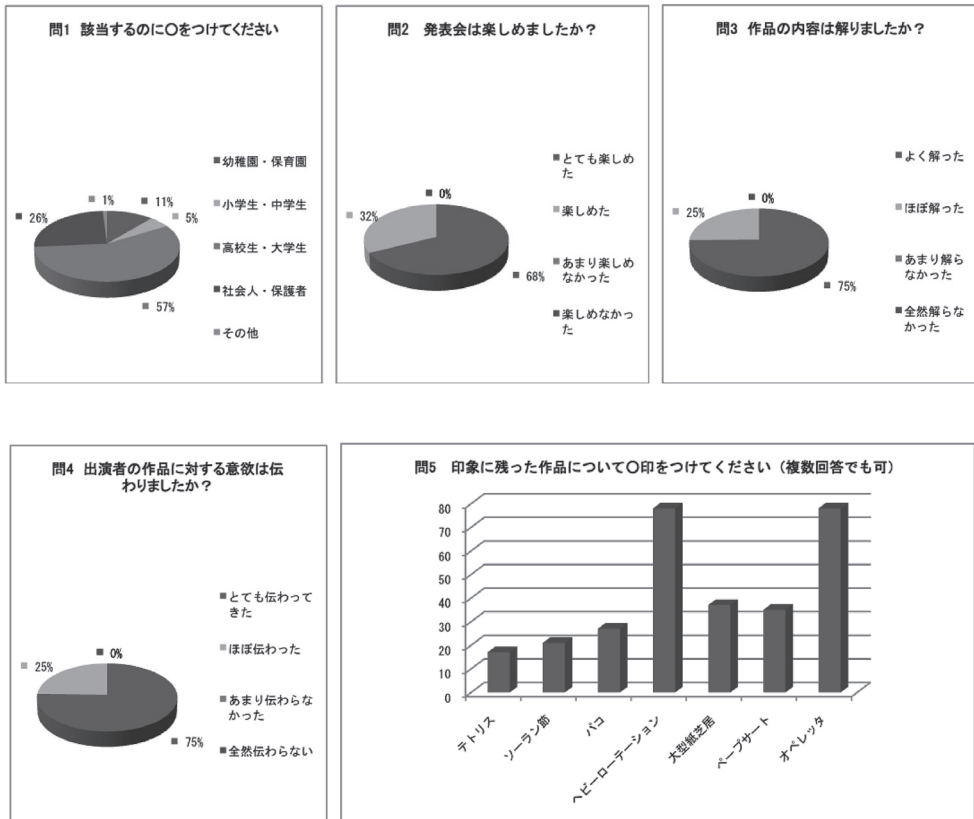
平成24年1月19日（3回目） 平成24年1月22日（発表会当日4回目）

観客に対するアンケート／平成24年1月22日

<学生に対するアンケート結果 全体（107名）>



<観客に対するアンケート結果 (99名) >



7. おわりに

子ども健康学科は、平成23年4月に初等教育科と養護教育科を統合し新学科としてスタートした。一期生として入学した1年生が実践力を養うために、表現の発表会を行うことになったが、1年生半期を終えたばかりの学生は、表現に必要な知識や技術が十分具わっていなかった。さらに約3ヶ月という短い練習期間で発表会を外部の観客に披露することは、かなり無謀な挑戦であったと思う。しかし、最初は“やらされている”と感じている学生も多くいたが、練習の過程で学生同士の連帯感が深まり、発表会の終了直後では満足感や充実感に変化していたと感じている。学生個々の表現の能力や技術には大きな差があるが、発表の感激を味わうことにより、教育者、保育者としての意欲に繋がると思われる。今後も表現発表会をとおして実践力を身につけ、併せて積極的な意欲が持てるような授業内容や指導法を深めていきたい。さらに表現の魅力と表現することの大切さを学生に伝えられるように我々も研鑽を積まなければならない。

引用・参考文献

注1 北村恵子「音楽表現作品発表会についての一考察」(1992) pp.71-79.

注2 「保育所保育指針」より(2000年告示)

注3 松本千代栄(1980)大修館書店 p.109.

<表現発表会の様子>



①大型紙芝居「けんくんのくれよん」



②創作ダンス「ソーラン節」



③オペレッタ「オズの魔法使い」



④創作ダンス「メモリーズ」



⑤フィナーレ「カーテンコール」

Discussion on Expressiveness Education -Training Through Expression Recitals-

Miki TSUYAMA*¹, Tsuyoshi TOMINAGA*¹, Yutaka AIHARA*²

*¹Department of childhood Care and Education

Kyushu Women's Junior University

*²Department of Education and psychology, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

The object of this research is to verify how to conduct and proceed through classes on expression through “expression recitals,” and to establish teaching methods to impart expressiveness. The survey method implemented a total of four consciousness surveys and analyses up to the end of the “expression recitals” with a view toward targeting the expressive regions of “preschool childcare indices” and “nursery school instruction procedures.” Specifically, surveys were conducted on the students from three viewpoints, namely: (1) sentiment; (2) eagerness; and (3) attitude, from the start of creation until the students’ goals were reached at the actual recital. Furthermore, how the content of the students’ expressions were communicated to the audience of the recital was analyzed. The following results of the analyses were clarified. (1) A large expansion in the fun and happiness of expression was seen from the start of creation up to the date of the recital, but there were many students who felt embarrassed to express themselves in front of people; (2) There were many students who wanted to work hard to make a good work, and who wanted to use their experiences in future recitals, but about half of the students gave their own opinions actively when creating a work; and (3) About 70 % of the students thought that they had an image of the content that they wanted to express and that they had expressed the image that they had in their mind. There was also the same level regarding expressing with consideration to the audience (the people who watched the recital) .

The objects of the class, specifically “to experience the fun and happiness of

expression;” “to have abundant feeling, to nurture the ability to express oneself, and to have abundant creativity;” and “to impart practical abilities that fuse the three fields” were objectively supported by targets been reached, in view of the audience survey results. However, there was not much change in the portion for active eagerness of the students themselves up to the day of the recital. It is thought necessary to consider teaching content and instructional methods that will nurture a positive attitude and to have an image of what to express.

Keywords : Image, expression, feeling, practical ability